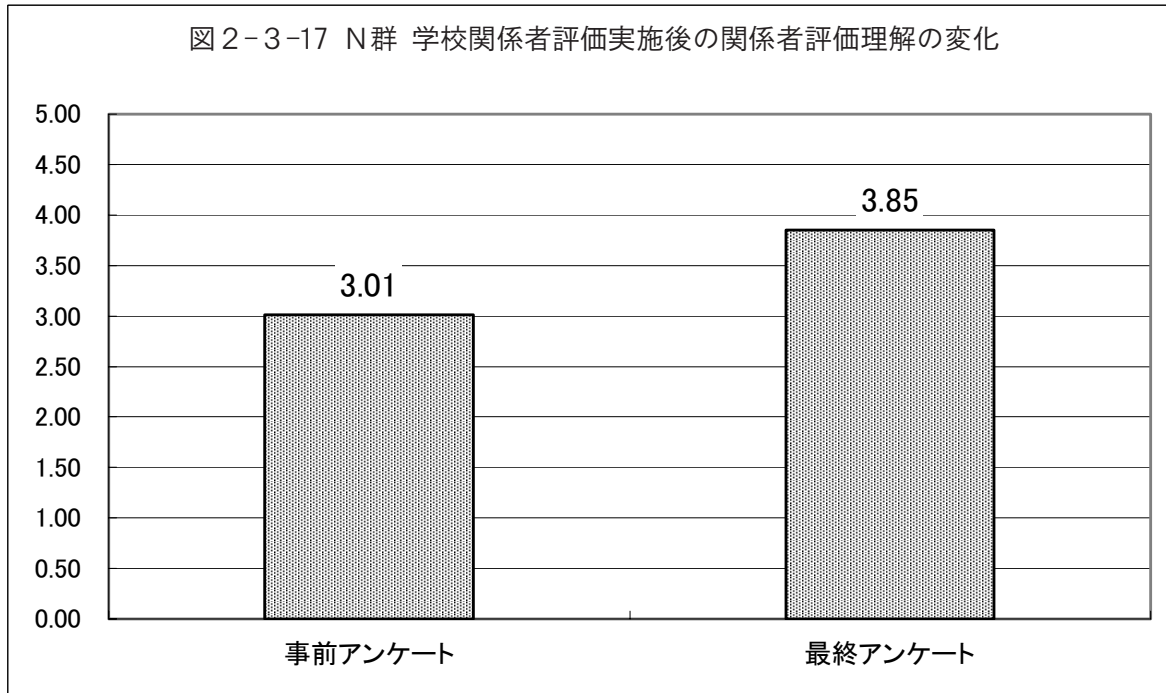


図 2-3-17 N群 学校関係者評価実施後の関係者評価理解の変化



### iii) N群の学校関係者評価委員の関係者評価にかかわる感情の変化

一連の学校関係者評価の過程を経験することで、N群の学校関係者評価委員の学校関係者評価にかかわる感情にどのような変化が生じたかを検討するため、学校関係者評価委員にかかわる不安感、負担感、意欲等に関する9項目について、対応のあるt検定により最終アンケートとの比較を行った。その結果、「幼稚園をよく知らないので不安である」「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「学校関係者評価委員として、適切な評価を行なう自信がある」の3項目で有意な差が見られ、「幼稚園をよく知らないので不安である」「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」については事前アンケートより最終アンケートの方で平均値が低くなっており、「学校関係者評価委員として、適切な評価を行なう自信がある」については事前アンケートより最終アンケートの方で平均値が高くなっていることがわかった（「幼稚園をよく知らないので不安である」： $t(110)=4.026, p<.01$ 、事前2.30(.91) > 最終2.04(.82)、「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」： $t(110)=5.094, p<.01$ 、事前2.81(1.03) < 最終2.31(.90)、「学校関係者評価委員として、適切な評価を行なう自信がある」： $t(109)=3.110, p<.01$ 、事前3.15(.79) < 最終3.35(.82)）（表 2-3-11）。

表 2-3-11 N群学校関係者評価実施後の関係者評価にまつわる感情の変化

	事前アンケート		最終アンケート		
	Mean	S.D.	Mean	S.D.	
幼稚園をよく知らないので不安である	2.3	0.9	2.0	0.8	事前>最終**
学校関係者評価についてよく知らないので不安である	2.8	1.0	2.3	0.9	事前>最終**
評価をする立場に責任感を感じた	3.9	0.8	3.8	0.9	n.s.
幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい	4.2	0.7	4.2	0.7	n.s.
幼稚園をよりよくするために役に立てるのは意義あることだ	4.4	0.6	4.4	0.6	n.s.
学校関係者評価は負担が大きそうである	2.9	1.0	2.8	1.0	n.s.
これをきっかけに今後も幼稚園と関わっていきたい	4.0	0.7	4.0	0.7	n.s.
学校関係者評価委員として適切な評価を行う自信がある	3.2	0.8	3.4	0.8	事前<最終*
学校関係者評価委員になるのは気が重い	2.6	0.9	2.5	0.9	n.s.

\*\*p<.01

\*p<.05

ここまでのN群の変化に関する分析から、今回の学校関係者評価研修プログラムを含まない、従来どおりの各園が独自に実施する学校関係者評価の過程を経験した後、学校関係者評価委員の幼稚園・幼稚園教育に関する理解、学校関係者評価に関する理解、学校関係者表会員として適切な評価を行う自信が高くなり、幼稚園や関係者評価についてよく知らないことからくる不安感が下がることが示された。

#### ④P群最終アンケートとN群最終アンケートの比較

ここまでは、P群N群それぞれの事前アンケートとその後のアンケートの比較を行い、研修プログラムと学校関係者評価参加経験による変化を見てきたが、ここではP群N群の最終アンケートのデータを直接比較することにより、研修プログラムの効果について検討する。

P群N群の最終アンケートの直接比較を行う前に、事前アンケートでの両者の幼稚園・幼稚園教育理解、学校関係者評価理解、学校関係者評価にかかわる感情（不安感・負担感・意欲など）に差があるのかどうかを確認するため、それぞれについて一元配置の分散分析を行った。その結果、『幼稚園教育の理解』『学校としての幼稚園の理解』『学校関係者評価理解』については有意な差は見られなかった（『幼稚園教育の理解』：F(1, 298)=.002, n. s.、『学校としての幼稚園の理解』：F(1, 298)=1.286, n. s.、『学校関係者評価の理解』：F(1, 291)=.584, n. s.）が、学校関係者評価にかかわる感情のうち「幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい」のみ有意な差が見られ（F(1, 297)=7.202, n. s.）、P群よりN群の方が高かった（P群3.92(.814) < N群4.16(.710)）。

### 1) 幼稚園・幼稚園教育理解の比較

『幼稚園教育理解』についてP・N群間の一元配置分散分析を行なった(表2-3-12)。その結果、有意な差は見られなかった( $F(1, 222)=3.019, n. s.$ )。『学校としての幼稚園理解』については、これまでの分析と同様、2項目「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」「幼稚園の特徴について理解している」について、それぞれ一元配置の分散分析を行なったが、いずれも有意な差は見られなかった(表2-3-13)。

表2-3-12

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	1.209	1	1.209	3.019	0.084
グループ内	88.920	222	0.401		
合計	90.129	223			

表2-3-13

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
学校教育における幼稚園の位置づけと目的を理解している	グループ間	0.477	1	0.477	0.907	0.342
	グループ内	118.892	226	0.526		
	合計	119.368	227			
幼稚園の特徴について理解している	グループ間	0.795	1	0.795	1.642	0.201
	グループ内	109.464	226	0.484		
	合計	110.259	227			

### 2) 学校関係者評価理解の比較

『学校関係者評価理解』についてP・N群間の一元配置の分散分析を行なった(表2-3-14)。これまでの分析と同様に7項目の得点を足し合わせ、項目数で除算した得点を算出し、比較に使用した。その結果、P群とN群の平均値に有意な差は見られなかった( $F(1, 217)=3.708, n. s.$ )。

表2-3-14

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	1.704	1	1.704	3.708	0.055
グループ内	99.745	217	0.460		
合計	101.450	218			

### 3) 学校関係者評価にまつわる感情の比較

学校関係者評価に対する不安感や負担感、意欲などの感情に関する項目のうち、事前アンケートと最終アンケートに共通でない項目「幼稚園をよりよくするために役にたてるのは意義

あることだ」を除いた8項目について、P・N群間の一元配置の分散分析を行ない比較した（表2-3-15）。その結果、「学校関係者評価委員として適切な評価を行なう自信がある」でのみ有意な差が見られ、P群よりN群の方が高かった（ $F(1, 227)=8.524, p<.01$ ）。

表2-3-15

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
幼稚園をよく知らないので不安である	グループ間	1.465	1	1.465	2.185	0.141
	グループ内	152.818	228	0.670		
	合計	154.283	229			
学校関係者評価についてよく知らない ので不安である	グループ間	0.699	1	0.699	0.849	0.358
	グループ内	187.862	228	0.824		
	合計	188.561	229			
評価をする立場に責任感を感じた	グループ間	0.102	1	0.102	0.123	0.726
	グループ内	189.480	228	0.831		
	合計	189.583	229			
幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい	グループ間	0.080	1	0.080	0.172	0.679
	グループ内	106.915	229	0.467		
	合計	106.996	230			
学校関係者評価は負担が大きそうである	グループ間	0.113	1	0.113	0.107	0.744
	グループ内	240.184	227	1.058		
	合計	240.297	228			
これをきっかけに今後も幼稚園と関わっていきたい	グループ間	0.219	1	0.219	0.430	0.513
	グループ内	116.673	229	0.509		
	合計	116.892	230			
学校関係者評価委員として適切な評価 を行う自信がある	グループ間	5.340	1	5.340	8.524	0.004
	グループ内	142.206	227	0.626		
	合計	147.546	228			
学校関係者評価委員になるのは気が 重い	グループ間	1.200	1	1.200	1.401	0.238
	グループ内	195.322	228	0.857		
	合計	196.522	229			

P群、N群それぞれの最終アンケートを比較した分析から、幼稚園・幼稚園教育の理解、学校関係者評価の理解に両群間の差はなく、「学校関係者評価委員として適切な評価を行なう自信がある」一項目のみ、N群の方が高いという結果が示された。

前項のP群・N群各群の変化の比較結果も合わせて考察する。P群では、幼稚園や幼稚園教育

について解説する研修1の後、幼稚園・幼稚園教育の理解が高くなり、学校関係者評価について解説する研修2の後、学校関係者評価の理解が高くなっていた。このことから、今回のプログラムの効果がある程度確認できたと考える。さらに、研修から日数が経ってから実施された学校関係者評価後も、幼稚園・幼稚園教育の理解、学校関係者評価の理解とも、プログラムに参加する前より高くなっていたことから、研修1,2の効果が持続するということも示唆されたと考える。一方、N群についても、学校関係者評価実施後、幼稚園・幼稚園教育の理解、学校関係者評価の理解、いずれも高くなっていた。よって、研修プログラムを行わない、従来の学校関係者評価過程を経験することのみでも、関係者評価委員の理解度は上がるものと考えられる。このN群の結果については、事前アンケートと最終アンケートを実施のした期間が短いことが影響していると考えられる。園によっては、同じ日に事前アンケート、関係者評価実施、最終アンケートの全てを行ったところもあるだろう。園からの幼稚園教育・学校関係者評価の説明の直後にアンケートに回答した場合、“理解度が上がった”という認知が強くなると考えられるし、実際に学校関係者評価を実施した後であれば、評価を行う自信についても、強く感じられるだろう。一方でこの結果は、園が行なっている学校関係者評価委員への幼稚園や幼稚園教育、学校関係者評価についての解説にも、確かな効果があることを示しているといえよう。今後、研修プログラムが提供された場合、それを利用して、それぞれの園が、その特徴を活かし、園にもっとも適したプログラムを組んでいく必要がある。各園に、そうした適切なプログラムの構成を行なえる力がある程度、あることが示されたと考えられるのではないだろうか。今後は共通のプログラムというよりは、各園の特色を活かしながら、再構成できるプログラムを開発していく必要があるかもしれない。

#### **(5) 学校関係者評価委員の特性による研修の有効性の違いの検討**

ここまでの分析で、研修1,2の有効性、学校関係者評価を経験することの有効性がある程度確認された。だが、(1)①に示されているとおり、各委員が元々もっている幼稚園・幼稚園教育や学校関係者評価についての知識にも、違いがあるものと考えられる。元々ある程度幼稚園や幼稚園教育についての知識がある人と、あまりそういった知識を持たずに学校関係者評価に参加する人とは、研修の有効性が異なるのだろうか。この点について検討するため、『幼稚園教育の理解』得点が低い群と高い群にわけ、分析を行なう。幼稚園教育理解の違いによる研修効果の違いを検討するため、『幼稚園教育理解』得点の平均値(3.39)±1/2標準偏差(.38)を基準に、平均値-1/2標準偏差(3.01)以下を「幼稚園教育理解低群」。平均値+1/2標準偏差(3.77)以上を「幼稚園教育理解高群」とし、2群の比較を行なった。

#### **①幼稚園教育理解度低高群別「幼稚園・幼稚園教育理解」への研修1の有効性、学校関係者評価プログラムの有効性の検討**

幼稚園教育理解低群・高群で、研修1後、学校関係者評価実施後の『幼稚園教育理解』『学校としての幼稚園の理解』の変化が異なるのかを検討するため、低群、高群それぞれについて、事前アンケートデータと研修1後データ、事前アンケートデータと最終アンケートデータ

を対応のあるt検定で比較した。事前アンケートと最終アンケートの比較における『学校としての幼稚園理解』については、これまでの分析と同様に、両アンケートの共通項目である「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」「幼稚園の特徴について理解している」の二項目について、それぞれ低群高群別に対応のあるt検定を行った。結果は、表2-3-16, 2-1-17のとおりである。どちらの得点に関しても、低群と高群で有意差の見られた点が異なり、『幼稚園教育理解』では、事前アンケートと研修1後の比較は低群も高群も同様に研修1後で平均値が高くなっていたが（低群：t(53)=15.867, p<.01, 高群：t(56)=7.352, p<.01)、事前アンケートと最終アンケートの比較では、低群のみ最終アンケートの方で有意に高くなっていた（t(36)=6.950, p<.01）。また、『学校としての幼稚園理解』については、研修1後は低高両群とも有意に平均値が高くなっていたが（低群：t(52)=9.090, p<.01, 高群t(56)=6.440, p<.01)、最終アンケートとの比較の2項目については、低群にのみ最終アンケートの方で平均値が高いという有意な差が見られた（「学校教育における「幼稚園」の位置づけ…」t(36)=3.819, p<.01, 「幼稚園の特徴…」t(36)=2.208, p<.01)（表2-3-16, 2-3-17）。

表2-3-16 『幼稚園教育理解』低高群別 幼稚園理解の変化(1)

		事前アンケート		研修1後アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『幼稚園教育理解』	低群	2.52	0.49	3.97	0.72	事前<研修1後**
	高群	4.16	0.39	4.63	0.40	事前<研修1後**
『学校としての幼稚園理解』	低群	3.20	0.75	4.33	0.65	事前<研修1後**
	高群	4.23	0.54	4.75	0.38	事前<研修1後**

\*\*p<.01

表2-3-17 『幼稚園教育理解』低高群別 幼稚園理解の変化(2)

		事前アンケート		最終アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『幼稚園教育理解』	低群	2.49	0.50	3.36	0.69	事前<最終**
	高群	4.16	0.39	4.16	0.63	n.s.
-----						
学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している	低群	3.05	0.94	3.70	0.66	事前<最終**
	高群	4.20	0.63	4.21	0.54	n.s.
幼稚園の特徴について理解している	低群	3.27	0.90	3.70	0.70	事前<最終*
	高群	4.32	0.56	4.34	0.53	n.s.

\*p<.05

\*\*p<.01



②幼稚園教育理解度低高群別「学校関係者評価理解」への研修2の効果、学校関係者評価経験の効果の検討

幼稚園教育理解低群・高群で、研修2後、学校関係者評価実施後の『学校関係者評価理解』の変化が異なるのかを検討するため、低群、高群それぞれについて、事前アンケートと研修2後、事前アンケートと最終アンケートを対応のあるt検定で比較した。最終アンケートとの比較においては、これまでの分析と同様に7項目を用いて得点を算出し、比較に使用した。結果は表2-3-18, 2-3-19のとおりである。事前アンケートと研修2後アンケートの比較、事前アンケートと最終アンケートの比較とも、低高両群いずれも有意な差が見られ、研修2後アンケート、最終アンケートの方で平均値が高くなっていることがわかった（研修2後との比較：低群 $t(41)=7.635, p<.01$ , 高群 $t(51)=3.898, p<.01$ 、最終との比較：低群 $t(33)=5.342, p<.01$ , 高群 $t(51)=3.898, p<.01$ ）。「学校関係者評価理解」の変化に関しては、幼稚園教育理解低高群で違った傾向はないといえる。

表2-3-18 『幼稚園教育理解』低高群別 学校関係者評価理解の変化(1)

		事前アンケート		研修2後アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『学校関係者評価理解』	低群	2.56	0.89	3.61	0.68	事前<研修2後**
	高群	3.53	0.71	3.95	0.53	事前<研修2後**

表2-3-19 『幼稚園教育理解』低高群別 学校関係者評価理解の変化(2)

		事前アンケート		最終アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『学校関係者評価理解』※	低群	2.38	0.89	3.44	0.41	事前<最終**
	高群	3.56	0.64	4.05	0.47	事前<最終**

③幼稚園教育理解低高群別、学校関係者評価委員の学校関係者評価にかかわる感情の変化

幼稚園教育理解低群・高群で、研修1後、研修2後、学校関係者評価実施後の、学校関係者評価にかかわる感情の変化が異なるのかを検討するため、低群、高群それぞれについて、事前アンケートと研修1後アンケート、事前アンケートと研修2後アンケート、事前アンケートと最終アンケートのそれぞれ対応する項目を、対応のあるt検定で比較した。なお、これまでの分析と同様に、対応する項目はないが、関連する項目がある場合は、それぞれの項目の平均値と標準偏差を示した（表2-3-20, 2-3-21, 2-3-22）。その結果、事前アンケートと研修1後アンケートの比較では、「幼稚園をよく知らないのが不安である」以外の4項目全てで有意な差が見られた。「学校関係者評価についてよく知らないのが不安である」については、低群高群とも事前より研修1後に有意に低く（低群： $t(52)=1.757, p<.05$ 、高群： $t(56)=2.406, p<.05$ ）、「幼稚園や園児が身近になるのがうれしい」「これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい」については、研修1後の方が高くなっていた（「園や園児が身近になるのがうれしい」：（低群： $t(52)=2.041, p<.05$ 、高群： $t(55)=3.7885, p<.01$ ）、「今後も園とかかわっていき

たい」：(低群：t(52)=2.272, p<.05, 高群：t(57)=4.016, p<.01)。事前アンケートと研修2後アンケートの比較では、「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」でのみ有意差が見られ、低群においてのみ、研修2後の方が低くなっていた (t(45)=2.611, p<.05)。事前アンケートと最終アンケートの比較では、「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」と「学校関係者評価は負担が大きそうである」で有意差が見られた。研修1後、研修2後との比較でも有意差の見られた「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」であるが、最終アンケートとの比較では、研修1後との比較と同様、低群高群とも事前アンケートより最終アンケートの方で低くなっていた (低群：t(3)=3.033, p<.05、高群：t(43)=2.585, p<.05)。「学校関係者評価は負担が大きそうである」については、研修2後アンケートとの比較では有意差が見られなかったが、最終アンケートとの比較では、高群のみ最終アンケートの方で低くなっていることがわかった (t(43)=2.039, p<.05)。関連項目の平均値を比較してみると、「幼稚園をよりよくするために役に立てるのは意義あることだ」「学校評価を通して幼稚園のために役に立てるのは意義あることだ」は、低群高群とも、事前、研修2後、最終アンケート、いずれも4以上と高い水準を保っている。一方、「これをきっかけに幼稚園とかかわっていききたい」「これからも幼稚園の応援団として学校評価にかかわりたい」については、高群は事前、研修1後、研修2後、最終アンケート、いずれも概ね4以上の高い水準であったが、低群は事前が3.80、研修2後の「これからも幼稚園の応援団として学校評価にかかわりたい」が3.54、最終アンケートが3.92と、幼稚園のために役に立てることの意義に関する項目に比べ、やや低い数値となっている。

表2-3-20 『幼稚園教育理解』低高群別 学校関係者評価にまつわる感情の変化(1)

		事前アンケート		研修1後アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
幼稚園をよく知らないので不安である	低群	2.66	0.90	2.39	0.91	n.s.
	高群	1.95	0.93	2.04	1.39	n.s.
学校関係者評価についてよく知らない ので不安である	低群	3.19	1.09	2.79	0.95	事前>研修1後*
	高群	2.61	1.03	2.18	1.27	事前>研修1後*
幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい	低群	3.79	0.82	4.04	0.73	事前<研修1後*
	高群	3.98	0.82	4.46	0.66	事前<研修1後**
これをきっかけに今後も幼稚園と関わ っていききたい	低群	3.79	0.69	4.08	0.78	事前<研修1後*
	高群	4.12	0.70	4.59	0.59	事前<研修1後**

\*p<.05

\*\*p<.01



表 2-3-21 『幼稚園教育理解』 低高群別 学校関係者評価にまつわる感情の変化(2)

		事前アンケート		研修2後アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
学校関係者評価についてよく知らない ので不安である	低群	3.24	1.06	2.76	0.85	事前>研修2後*
	高群	2.62	1.02	2.36	0.92	n.s.
評価する立場に責任感を感じた	低群	3.89	0.75	3.86	0.77	n.s.
	高群	3.87	0.86	3.96	0.99	n.s.
学校関係者評価は負担が大きそうである	低群	3.09	0.95	3.11	0.83	n.s.
	高群	3.02	1.01	2.96	1.04	n.s.
学校関係者評価委員として適切な評価 を行なう自信がある	低群	2.74	0.71	2.89	0.74	n.s.
	高群	3.50	0.67	3.40	0.66	n.s.
学校関係者評価委員になるのは気が 重い	低群	3.00	0.94	3.00	0.79	n.s.
	高群	2.45	1.10	2.43	0.92	n.s.
幼稚園をよりよくするために役に立てる のは意義あることだ	低群	4.23	0.57	-	-	-
	高群	4.58	0.53	-	-	-
学校評価を通して幼稚園のために役に 立てるのは意義あることだ	低群	-	-	4.18	0.45	-
	高群	-	-	4.57	0.60	-
これをきっかけに今後も幼稚園とかか わっていきたい	低群	3.80	0.65	-	-	-
	高群	4.13	0.73	-	-	-
これからも幼稚園の応援団として学校 評価にかかわりたい	低群	-	-	3.54	0.89	-
	高群	-	-	4.25	0.68	-

\*p<.05

\*\*p<.01

表 2-3-22 『幼稚園教育理解』 低高群別 学校関係者評価にまつわる感情の変化(3)

		事前アンケート		最終アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
幼稚園をよく知らないので不安である	低群	2.65	0.95	2.49	0.84	n.s.
	高群	1.91	1.03	1.84	0.64	n.s.
学校関係者評価についてよく知らない ので不安である	低群	3.32	1.13	2.65	0.89	事前>最終*
	高群	2.57	1.07	2.14	0.77	事前>最終*
評価をする立場に責任感を感じた	低群	3.92	0.81	3.69	1.01	n.s.
	高群	3.84	0.87	3.67	0.94	n.s.
幼稚園や幼児が身近になるのがうれし い	低群	3.78	0.89	3.68	1.00	n.s.
	高群	4.00	0.86	4.19	0.59	n.s.
学校関係者評価は負担が大きそうであ る	低群	3.11	1.02	2.86	0.95	n.s.
	高群	3.00	1.01	2.64	1.01	事前>最終*
これをきっかけに今後も幼稚園に関わ っていきたい	低群	3.81	0.70	3.92	0.80	n.s.
	高群	4.14	0.60	3.98	0.64	n.s.
学校関係者評価委員として適切な評価 を行う自信がある	低群	2.65	0.75	2.81	0.66	n.s.
	高群	3.42	0.73	3.37	0.62	n.s.
学校関係者評価委員になるのは気が 重い	低群	3.11	0.97	2.78	0.95	n.s.
	高群	2.47	1.03	2.53	0.98	n.s.
幼稚園をよりよくするために役に立てる のは意義あることだ	低群	4.24	0.60	-	-	-
	高群	4.56	0.55	-	-	-
学校評価を通して幼稚園のために役に 立てるのは意義あることだ	低群	-	-	4.03	0.83	-
	高群	-	-	4.33	0.52	-

\*p<.05

ここまでの分析結果から、「学校関係者評価の理解」に関しては、『幼稚園教育の理解』低群でも高群でも同じ傾向が見られた。関係者評価委員が元々幼稚園教育にある程度知識があっても、あまり知識がなくても同じように、研修プログラムと学校関係者評価参加の経験が、理解を上げる効果があることが示されたと考える。一方、「幼稚園・幼稚園教育の理解」に対する研修プログラムの効果については群ごとに違いが見られ、幼稚園教育理解低群では研修1後、最終アンケート後いずれでも平均値が高くなっていったが、高群では研修1後のみ有意に高く、最終アンケート後では有意差がなかったことから、元々ある程度知識をもつ関係者評価委員に

関しては、一連の学校関係者評価研修プログラム終了後まで期間が比較的長く、研修1の幼稚園教育理解への効果が持続しにくい、元々幼稚園教育に関してあまり知識がない委員に関しては、今回の研修プログラムに参加することが、幼稚園教育に関する理解を高める持続的効果をもつことが示唆された。また「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」が、『幼稚園教育の理解』高群では、研修1後アンケートと最終アンケート後でのみ有意に低く、研修2後では変化がなかったのに対して、低群では研修1後、研修2後、最終アンケート後全てで事前アンケートより低くなっていたことから、学校関係者評価について説明した研修2は、幼稚園教育についてあまり知識を持たない委員の方により効果があり、元々ある程度の幼稚園教育に関する知識を持つ委員については、実際の関係者評価の実施まで終わってみて初めて、関係者評価そのものに対する不安感が低減するのだと考えられよう。さらに「学校関係者評価は負担が大きそうである」について、研修2後では両群とも変化が見られなかったこと、低群については最終アンケート後にも変化がなく、高群のみ有意に低くなっていたという結果から、幼稚園教育についてあまり知識を持っていなかった関係者評価委員の場合、2回の研修を受け、実際に関係者評価を実施することで、知識がないことからくる不安は軽減されるという意味で研修プログラムの効果は十分にあったが、複数回幼稚園に通って研修を受け、様々な新しい知識を学び、かつ責任ある評価を任されるという体験は、やはり負担感を感じさせるものであったのだと考えられよう。逆に、元々幼稚園教育に関し、ある程度の知識を持っていた関係者評価委員は、知識があるがゆえに当初からある程度の負担は認識していたが、実際に関係者評価をやり終えたことで、一連の関係者評価の内容もわかり、それほど大きな負担感を感じなくなったのではないかと考えられる。こうしたことから、幼稚園のために役に立てるのは意義あることだという意義の認識は低群高群とも高いにも関わらず、「これをきっかけに今後も幼稚園にかかわっていきたい」という今後のかかわりへの意欲については、低群の方は高群に比べ低めになっているのではないだろうか。今後、研修プログラムを実施していく際に、元々幼稚園教育にあまりなじみがなく、知識に不安を感じたり、評価に負担感を感じている関係者評価委員について、幼稚園の応援団として継続的にかかわってもらうために、プログラム・教材をうまく活用し、負担感を払拭していくことが見込まれる。

#### ④N群における幼稚園教育理解低高群別の学校関係者評価経験後の変化の検証

(2)③の分析で、N群においても、学校関係者評価経験後に、幼稚園・幼稚園教育の理解、学校関係者評価の理解、学校関係者評価にかかわる感情に変化が生じたことが示されたが、その変化は、元々幼稚園教育についてある程度知識のある委員と、あまり知識のない委員で異なるのかどうかを検討する。

##### 1) 幼稚園教育理解低高群別 学校関係者評価委員の幼稚園・幼稚園教育の理解の変化

『幼稚園教育理解』低高群別に、『幼稚園教育理解』と『学校としての幼稚園理解』について、事前アンケートとN群最終アンケートを対応のあるt検定で比較した。『学校としての幼稚園理解』については、これまでの分析と同様に、「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」「幼稚園の特徴について理解している」の2項目を比較した。

『幼稚園教育理解』については、低群には有意な差が見られ、最終アンケートの方で高くなっていた ( $t(33)=9.042, p<.01$ ) が、高群には有意な差が見られなかった。「学校教育における「幼稚園」の位置づけと目的を理解している」「幼稚園の特徴について理解している」についても、高群では有意な差は見られなかったが、低群ではいずれも有意に最終アンケートの方で高くなっていた（「学校教育における…」  $t(34)=3.855, p<.01$ , 「幼稚園の特徴…」  $t(34)=4.527, p<.01$ ）（表 2-3-23）。

表 2-3-23 N群 『幼稚園教育理解』低高群別 幼稚園理解の変化

		事前アンケート		N群最終アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『幼稚園教育理解』	低群	2.60	0.40	3.60	0.57	事前<研修1後***
	高群	4.17	0.41	4.21	0.46	n.s.
-----						
「学校教育における「幼稚園」の位置 づけと目的を理解している	低群	2.89	0.87	3.71	0.93	事前<研修1後**
	高群	4.33	0.68	4.41	0.50	n.s.
幼稚園の特徴について理解している	低群	2.83	0.82	3.71	0.86	事前<研修1後**
	高群	4.39	0.50	4.43	0.50	n.s.

\*\* $p<.01$

## 2) 幼稚園教育理解低高群別 学校関係者評価委員の学校関係者評価の理解の変化

『幼稚園教育理解』低高群別に、『学校関係者評価理解』について、事前アンケートとN群最終アンケートを対応のあるt検定で比較した。プログラム群（P群）の場合と同様の7項目を用いて得点を算出し、比較に使用した。その結果、低群高群いずれも最終アンケートの方で有意に高くなっていた（低群 $t(30)=7.374, p<.01$ , 高群 $t(25)=-2.969, p<.01$ ）（表 2-3-24）。

表 2-3-24 N群 『幼稚園教育理解』低高群別 学校関係者評価理解の変化

		事前アンケート		N群最終アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
『学校関係者評価理解』	低群	2.35	0.80	3.66	0.65	事前<最終**
	高群	3.67	0.94	4.08	0.67	事前<最終**

\*\* $p<.01$

## 3) 幼稚園教育理解低高群別 学校関係者評価委員の学校関係者評価にまつわる感情の変化

『幼稚園教育理解』低高群別に、学校関係者評価委員にかかわる不安感、負担感、意欲等に関する9項目について、対応のあるt検定により事前アンケートと最終アンケートとの比較を行った。その結果、低群でのみ「幼稚園をよく知らないので不安である」「学校関係者評価についてよく知らないので不安である」「学校関係者評価委員になるのは気が重い」の3項目については最終アンケートの方で低く（「幼稚園を…」  $t(35)=4.089, p<.01$ , 「学校関係者評価に

ついて…」 $t(35)=3.107, p<.01$ , 「学校関係者評価委員になるのは…」 $t(35)=2.447, p<.01$ 、  
「学校関係者評価委員として適切な評価を行なう自信がある」については最終アンケートの方  
で高くなっている ( $t(35)=2.646, p<.01$ ) という有意な差が見られ、高群では有意な差の見ら  
れた項目はなかった (表 2-3-25)。

表 2-3-25 N群『幼稚園教育理解』低高群別 学校関係者評価にまつわる感情の変化

		事前アンケート		N群最終アンケート		
		Mean	S.D.	Mean	S.D.	
幼稚園をよく知らないので不安である	低群	2.92	0.84	2.47	0.97	事前>最終**
	高群	1.78	0.80	1.67	0.62	n.s.
学校関係者評価についてよく知らな いので不安である	低群	3.33	0.89	2.67	0.99	事前>最終*
	高群	2.33	1.04	2.15	0.86	n.s.
評価をする立場に責任感を感じた	低群	3.94	0.71	3.75	0.84	n.s.
	高群	4.11	0.69	3.96	1.00	n.s.
幼稚園をよりよくするために役に立て るのは意義あることだ	低群	3.94	0.53	3.94	0.75	n.s.
	高群	4.44	0.58	4.44	0.64	n.s.
幼稚園や幼児が身近になるのがうれ しい	低群	4.17	0.57	4.11	0.80	n.s.
	高群	4.71	0.46	4.57	0.50	n.s.
学校関係者評価は負担が大きそうで ある	低群	3.37	0.97	3.29	0.89	n.s.
	高群	2.48	0.80	2.81	1.14	n.s.
これをきっかけに今後も幼稚園と関わ っていきたい	低群	3.72	0.66	3.81	0.82	n.s.
	高群	4.37	0.56	4.33	0.62	n.s.
学校関係者評価委員として適切な評 価を行う自信がある	低群	2.75	0.87	3.08	0.84	事前<最終*
	高群	3.62	0.57	3.65	0.89	n.s.
学校関係者評価委員になるのは気が 重い	低群	3.11	0.78	2.81	0.82	事前>最終*
	高群	2.25	0.97	2.25	1.00	n.s.

\* $p<.05$

\*\* $p<.01$

N群の分析結果から、元々幼稚園教育に関する知識をあまりもっていなかった委員にとっては、従来の各幼稚園による学校関係者評価を経験することで、幼稚園・幼稚園教育に関する理解、学校関係者評価に関する理解が高まり、学校関係者評価に臨む際に抱く不安感・負担感を軽減し、学校関係者評価委員として適切な評価を行なう自信を高めることが示唆されたといえよう。



P群とN群の分析結果を比較すると、もっとも異なる点は、N群においては、『幼稚園教育の理解』高群では、有意な結果が『学校関係者評価の理解』でしか見られず、『幼稚園教育の理解』についても、学校関係者評価にかかわる感情についても、低群でのみ変化が見られているという点である。P群でも、最終アンケートとの比較では、『学校関係者評価の理解』と関係者評価に対する不安感・負担感の項目でしか高群の有意差は見られていないが、研修1後、研修2後アンケートとの比較では、『幼稚園教育の理解』、『学校としての幼稚園の理解』、『学校関係者評価の理解』の理解が高まり、「幼稚園や幼児が身近になるのがうれしい」、「これをきっかけに今後も幼稚園とかかわっていきたい」というポジティブな感情が高まっていることが示されている。こうしたことから、元々、幼稚園教育に関してあまり知識を持たずに学校関係者評価に参加した学校関係者評価委員にとっては、研修プログラムの含まれない、一連の学校関係者評価過程に参加するだけでも、ある程度理解度が高まり、不安感・負担感も軽減されるが、元々ある程度の知識をもっている学校関係者評価委員にとっては、そうした実際のプロセスへの参加だけでは、元々もっていた知識以上の理解度の上昇はあまり期待できず、幼稚園や幼稚園教育の理解度のさらなる上昇、幼稚園や幼児に対するポジティブな感情、幼稚園にかかわっていく積極的な意欲の上昇のためには、今回のような組織的な研修プログラムを受けることが必要であるといえるだろう。

#### 〔総括的考察〕

本分析の結果から、この学校関係者評価研修プログラムを経験することにより、学校関係者評価委員の幼稚園・幼稚園教育の理解度、学校関係者評価の理解度を上げ、関係者評価に関わる不安感や負担感を軽減し、幼稚園や幼児に対するポジティブな感情、幼稚園に積極的にかかわっていきこうという意欲が高まることが示唆され、今回の研修プログラムの有効性が、ある程度確認されたと考える。N群の関係者評価委員でも、最終アンケート時には幼稚園・幼稚園教育に関する理解、学校関係者評価に関する理解があがっていたことから、各園が独自に工夫して行なっている学校関係者評価も有効なものであることが考えられるが、幼稚園教育に関して知識をもっている関係者評価委員に関しては、系統だった研修プログラムが有効であることが示され、ここでも研修の有効性が確かめられたといえよう。どのような特性の学校関係者評価委員にも効果をあげるためには、入念に考えられた研修プログラムが必要だといえる。

学校関係者評価委員の幼稚園、子ども、子どもの育ちへの関心は高く、幼稚園の役に立つことについての意義の認識も高い。こうした幼稚園を取り巻く人々に、幼稚園と密にかかわるきっかけを与え、幼稚園についてよく知ってもらえる学校関係者評価は、幼稚園にとって、“幼稚園の応援団”を増やしていくのに、非常に意義のある活動となるだろう。今後、多くの人により効果のある研修を各地の幼稚園で行なえるよう、研修プログラムの内容についても改良を進めていく必要があるだろう。

(丹羽さかの)



## 4. 学校関係者評価の実施事例（インタビュー調査）

### (1) 目的と意義

学校関係者評価委員の研修プログラムの効果については、プログラム群（P群）について、①学校関係者評価委員用で、研修プログラム前後の変化をみるもの（実施以前、1回目研修後、2回目研修後、全体実施後の4回）、②学校評価の実施者用で、DVDやガイドブック、ハンドブックなどの教材やプログラムに対する意見を問うものを実施している。

しかし、質問紙法は一度に比較的大量のデータを得て、結果を一般化するのには適している反面、プログラムの実施過程での実施者の疑問や意見、様々な認識や感情の細部に関する情報は得にくい。各園における学校評価委員の研修会の様子や、実施担当者や学校関係者評価委員が感じる疑問や意見、また、この研究が意図した結果以外の副次的な効果、例えば、これを行うことによる幼稚園の教職員への波及効果や組織としての活性化、あるいは担当者の実施に伴うアンビバレントな思い（意義はわかるが、多忙で余裕がない）などについての資料をヒアリング調査で得ることにより、プログラムの今後の改善が可能になるだろう。

本調査では、プログラム群（P群）のなかから各地域1園ずつを抽出し、プログラムの意義や目的、実施方法やその過程、プログラムの今後の課題、プログラムの実施過程における学校関係者評価委員の変化、実施する園の教職員の変化などについてヒアリングを行った。

基本的にヒアリング調査は、調査者と被調査者とが対話を通して独自のコミュニケーションを生み出していく過程に意義があり、一律に質問項目を用意することは必ずしも適当でない。結果のまとめも、3事例の実情や実施者の内面をきめ細やかに記述していくことでまとめられるだろう。しかし、3事例ともに、これだけは聞いておくべきという質問があり、その回答が得られるとすれば、共通項として分析も可能になる。したがって、ある程度の共通の質問を用意し、その質問項目（表2-4-1参照）については調査者が重要だと思った内容をその場で生成しながら、質問していく半構造化面接の手法を用いることにした。

### (2) 方法

#### ①協力園・協力者

奈良市教育委員会、佐賀市教育委員会、全日本私立幼稚園連合会に依頼し、それぞれ1園ずつ、合計3つの園（A園、B園、C園）を抽出していただいた。協力者は各園で学校関係者評価を担当した園長先生である。

#### ②手続き

対面式のインタビュー調査、データは可能な場合にはICレコーダーに録音して文字化した。共通のヒアリング項目については表2-4-1に示す通りである。

表2-4-1 ヒアリングの共通項目

**1) プログラムへの参加の印象**

(「プログラムへの参加、ありがとうございます。

こんなのをしたのですが・・・」と教材を見せながら想起してもらう)

- ・最初に説明会に参加したときに、この研究へ協力することについてどういう印象をもったか
- ・その印象は実施するうちに変化したか、しないかとその理由

**2) プログラムの実施のための体制づくり**

プログラムを実施したのは園の誰か

(最終アンケートでプログラム群(P群)には質問しようと思っていますが、たぶん管理職である園長や主任などではないか)

関係者評価委員はどのような方に、どのように頼んだか?

選出で苦勞した点や良かった点はあるか?

**3) プログラムの実際**

- ・どのように実施して下さったか。できるだけ具体的に。

**4) プログラム実施中に生じた課題**

- ・教材や、実施の手順、その他のなかで戸惑ったことや、問題はあったか?

教材(DVD「幼稚園」版「学校評価」版、ガイドブック、ハンドブック)はどうだったか?

教材や実施順からなる全体のプログラムはどうだったか?

**5) 今後のプログラムの改善**

- ・今後、先生が教材やプログラム(やり方順や回数その他)を改善するとしたら、どうしたいか

**6) 組織としての園の体制や教職員の変化**

- ・このプログラムへの参加を教職員に伝えたか
- ・DVDを教職員は視聴したか
- ・この参加して、園としてなにか変わったことがあるか

**7) プログラムの効果**

- ・こういう研修は現場にとって役に立つと思うか、余り役にたたないと思うかとその理由

**8) このようなプログラムに今後も参加してもよいと思うか**

**9) 実践研究への動機づけ**

- ・大学や行政とともに、教育の質を高めるために、今回のプログラムの効果をみるような、大学や教育行政(文科省や教育委員会など)との共同研究に今後も参加してもよいと思っているか

**10) その他**

- ・その他、重要だと思われる内容
- ・関連資料の収集

(岩立京子)

### (3) 結果

#### ① A幼稚園

調査日時：平成22年1月6日、13：30～15：00

調査場所：A幼稚園

調査協力者：A幼稚園園長

調査実施者：神長美津子・安達譲

A幼稚園では、学校評議員の方が学校関係者評価委員として本プロジェクトに参加した。以下、プロジェクトの実施の様子について、園長にインタビューをした結果を要約したものである。

#### 1) プログラムへの参加の印象

- ・年度当初にこのプログラムのことをうかがった際には、評価委員が集まって何らかの研修を受けると思っていたが、6月のプロジェクトの説明会で、そうでないことがわかった。その際、プロジェクトについて丁寧に説明いただいたので、特別に難しく思わなかった。DVDやハンドブックを送っていただいて、当初の説明のことを思い出し、確認してきたので、割合スムーズに出来たのではないかと思う。
- ・短い期間で実践し報告してきたが、予め研究スケジュールを聞いていたので、園の学校評価のスケジュールの中に組み込んでいくことにした。A幼稚園では、学校評議会のメンバーをそのまま学校関係者評価委員にして、学校評議会と学校関係者委員会とをかねて動かすようにした。二つを、別々に動かすことは、時間的にも人的にも難しい。

#### 2) プログラムの実施のための体制づくり

- ・A幼稚園では、学校評議員の方と、学校関係者評価委員を兼ねている。学校関係者評価委員は以下の3名である
  - 交通指導員 70代（学校評議員2年目）
  - 主任児童員 40代（学校評議員2年目）
  - 前PTA会長 40代（学校評議員1年目）
- ・職員9名はいるが、このプロジェクトは園長が中心だった。主任の先生にも参加してもらいたいが、実際に、学校関係者評価委員の方々には、園の子どもたちの様子を見ていただきたいので、どうしても学校関係者評価委員会は保育時間中になる。主任は、特別支援の子どもとかかわっているの、学校関係者評価委員会にはなかなか出席できない。

#### 3) プログラムの実際

- ・学校関係者評価委員会は、6月・7月・11月・12月の4回実施した。1回目の委員会は、プロジェクトの説明会の前であるが、当初学校評議会を開くことを予定していたので、そのまま第1回の学校関係者評価委員会とした。A幼稚園の概要、パンフレットを配り幼稚園教育の特質などについて、園長より説明した。第2回学校関係者評価委員会は、7月に開催し、保育に参加してもらった後にDVD「どんなところ？幼稚園」をみた。第3回学校関係者評価委員会は11月に開催し、DVD「学校評価とは」をみた。第4回学校関係者評価委員会で

は、自己評価の結果について評価していただいた。

- ・学校関係者評価委員の中で、学校評議員2年目の方もDVD「どんどころ？幼稚園」を見て、「幼稚園教育がよく理解できた」と、言っていた。特に、前PTA会長は、DVDをみて、日頃の保育場面を思い出し、「あのときは、そういう意味だったんですね」と、実際の園の保育場面に結びつけて深く納得できたようだ。70代の評価委員の方は、よく見ていただいていたがどこまで理解できたかはわからないが、学校評議員をして2年目なので、好意的にはうけとめたようだ。
- ・3回目（11月）の委員会で、DVD「学校評価」とは？」を見たが、合わせてA幼稚園の保護者のアンケート、自己評価をまとめて報告書として提示した。また、幼稚園での活動の様子を撮った写真も提示し、幼稚園生活や活動を理解してもらおうようにした。
- ・4回目の委員会では、自己評価報告書を示したが、数字で出せるものはできるだけ数字で出した。評価委員にチェックシートを書いていただく際、評価委員会で自由に話し合った後、その場で記入するのではなく、後日、郵送していただくようにした。その場で書くと、少人数なので意見を他の人とそろえなくてはならないと思ってしまうのではないかと思い、後日提出することにした。
- ・保護者アンケートの項目、評価項目はここ何年か繰り返しているもので、ほぼ定着している。保護者には、アンケートの結果をこれからお手紙で通知することになっている。保護者に通知するお手紙には、アンケートに書かれた意見のすべてを提示し、必要な内容については、園としての考え方や取り組みなどを書き添えて通知しようと思う。

#### 4) プログラム実施中に生じた課題

A幼稚園では、問題らしい問題は起きず、スムーズにプログラムを実施していると思われる。ただその背景には、園長先生が、園運営の全体を見通し、無理のない形でこのプロジェクトを実施してきたことがある。たとえば、学校評議員3人に学校関係者評価委員を依頼し、幼稚園の様子を理解されている方が、DVDを見てその趣旨を理解し、適切なアドバイスをしている。また、DVDをみる際にも、予め園長がみて、評価委員の方が理解し受けとめてくれるためにはどうしたらよいかを考え会議資料を用意しているところなどである。以下インタビューの内容である。

- ・7月のDVD「どんどころ？幼稚園」を見る際、いつもの園長室ではなく、リズム室で視聴したが、評価委員は緊張して見ていたようだ。見た後、感想を聞かれると思ったのでしょうか、一生懸命理解しようとしていた様子が見受けられた。その雰囲気を知りたくなくてほしい、11月にDVD「学校評価」とは？」は、園長室でパソコンの画像で見た。見ながら評価委員同士が会話を交わすような和んだ雰囲気があり、よかった。評価委員がみている際には、園長自身が席を外すなどして、自由にどうぞという雰囲気に心がけた。
- ・DVD「どんどころ？幼稚園」は、2回目の学校関係者評価委員会の時にみたが、1回目（6月）の委員会にA幼稚園の幼児の様子や幼稚園教育について説明していたので、納得していたようだ。DVDをみることにより、整理ができたという感想も寄せられた。ある程度、幼稚園の実情を話してから、それから「どんどころ？幼稚園」のDVDをみると効果的である。
- ・3回目の学校関係者評価委員会で「学校評価」とは？」のDVDを見るときは、それだけで

は、イメージがわからないだろうと思い、合わせてA幼稚園の保護者のアンケートや自己評価の評価項目を示し、DVDとA幼稚園で行っていることを関連させて説明することにした。その時は、A幼稚園の1年間の生活の写真も見ていただいた。

- ・「学校評価」とは？」のDVDは難しいなと思ったが、できるだけ口を挟まないようにした。終わった後、「みなさんおわかりいただけました？」とうかがってみた。どこまでわかっていただいたかはよくわからない。その後、A幼稚園の保護者アンケートや自己評価の評価項目などを見ていただき、具体的なイメージを伝えた。具体的なものがあることで、学校評価の全体がわかるのではないかと思ったからである。
- ・保護者アンケートの結果で、教育目標が、保護者にわかっていただけていないことがわかった。その解釈として、評価委員の方から、保護者の方は、子どもが元気に喜んで園に行くことに関心をもっている。保護者は、「それが一番」と思っているだろう。保護者の視点と園の視点とが異なるのだから、それを踏まえて保護者にアンケート結果についての解説していくことが必要と評価委員がコメントしてくれた。評価委員が、保護者との連携のパイプ役的な役割を果たしてくれていると思った。

#### 5) 今後のプログラムの改善

- ・A幼稚園では、評価項目については重点化していないので、DVDの内容と異なる。そのことについて評価委員に、説明していないが、問題になっていない。評価委員の方は、DVDの説明と園のやり方との違いは意識していないようだ。情報量が多いので、そこまで把握していないのかもしれない。
- ・せっかくなので、もっと動画の方がよいところもあつたらとりつきやすいのではないかかという感想もいただいた。

#### 6) 組織としての園の体制や教職員の変化

- ・今回は、学校評価委員は、学校評議員を兼ねている。また、人数も3人という少人数で、ハンドブックで示している体制とは異なる。A幼稚園でできる学校評価の体制でおこなってきた。
- ・今回は、園長中心で動かざる得なかったのが、今後は教職員の方々に直接参加できる機会もつくる必要があると反省している。
- ・DVDなどは、学校関係者だけでなく、職員や保護者にも見せたいと思った。教職員には、いつも園長の方から評価委員会の様子を伝える形だったので、教職員も直接参加できる機会もつくる必要があると思う。反省している。
- ・教職員にも、ぜひDVDをみせて、共有していきたいと思っている。

#### 7) プログラムの効果

- ・この教材があることで、学校関係者評価委員が幼稚園教育や学校評価について理解を深め、うまく学校評価を実施することができたことは確かである。同じことでも立場を変えて伝え合うことでより理解が深まったと思う。
- ・教材があることで、前進できたような気持ちである。ただし、こうしたプロジェクトでは、いかに園の実情と絡めて実施していくかが重要ではないか。教材に振り回されたり、やらな



くてはならないことに追われたりするのではなく、園の中でうまく実施していくためにはどうするかを踏まえ、教材の活用をすべきではないかと思う。

#### 8) このようなプログラムに今後も参加したいと思うか

- ・是非参加したい。また、今回の教材は引き続き活用したい。2年目になると、同じDVDでも活用の仕方がかわってくるかもしれない。

#### 9) その他

- ・DVD「どんなところ？幼稚園」は保護者にも見てもらいたい。また、2本のDVDとも教職員にも見てもらいたい。
- ・評価委員の任期は、あまり短いサイクルで変わらない方が、園をよく見てくれるのではないかと思う。ただし、逆に変わること新鮮な目で見えてくれることもある。

(神長美津子)

## ② B幼稚園

調査日時：平成22年1月12日、11:00～12:30

調査場所：B幼稚園

調査協力者：B幼稚園園長

調査実施者 岩立京子

### はじめに

園長先生は小学校校長経験があり、学校経営や学校評価等に関する基礎知識や実務経験をもっており、今回のプロジェクトの説明会のときから積極的に、学校関係者評価の実施に係る具体的な質問を行っていた。また、園長先生は学校評価の意義や目的等を以前より理解しており、この調査が実施される前から、園の教育課程を編成し、学校評価を実施していた。園長先生のリーダーシップのもと、B幼稚園では教育課程から重点目標を抽出し、評価項目を作成し、教職員による自己評価を行っていた。

以下に、インタビューの概要を示す。

#### 1) プログラムへの参加の印象

学校評価については経験があったが、プログラムの教材などが無い状態で、言葉だけで説明されても、全体の過程が見通せなかった。何をして、それをどのように使って回答するのかなどがわからなかった。DVDでこの事業をどうするか、DVDは資料として役に立つのか等についてわからず、不安もあった。

ただ、この印象は、研修プログラムを推進していくうちに軽減され、学校関係者評価委員の方は学校関係者評価の研修に慣れていったようだ。

#### 2) プログラムの実施のための体制づくり

学校関係者評価委員会を実施する際の費用をどこから捻出するのかという現実的な課題があると思う。これについては、幼稚園特有の課題だと思われる。幼稚園では公立と私立では、園